

# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第10号

(2013年2月)



～牧野富太郎生誕150年～

北光クラブ  
自然観察クラブ

『牧野植物学全集』 誠文堂新光社発行

日本植物図説集	昭和9年9月15日発行
<b>植物随筆集</b>	<b>昭和10年3月25日発行</b>
植物集説 上	昭和10年8月20日発行
植物集説 下	昭和11年7月23日発行
植物分類研究 上	昭和10年12月21日発行
植物分類研究 下	昭和11年4月15日発行
総索引 全	昭和11年10月22日発行

牧野植物学全集は、昭和9年以前に出版された『日本植物志図篇』『新撰日本植物図説』『大日本植物志』、牧野の主宰する『植物学雑誌』『植物研究雑誌』及びその他の雑誌に発表された著作をまとめたものである。『日本植物図説集』の序で「今此我が全集八名ハ全集ナレドモ実ハ半全集即チ前全集デアル、」と書いている。それでも昭和15年に発行された『牧野日本植物図鑑』とともに牧野の植物学研究の総決算とも言える大作である。

『植物随筆集』は、著者が題言として「此篇ハ植物随筆集日トシテ植物知識ヲ得ルト同時ニ、成ルベク優シキ且趣味アル文章ヲ蒐メ録シタモノデアル」と書いているとおり、読み物として楽しめる著作が集められている。牧野植物学全集以降は随筆集を単行本としていくつか出版しているので、ここで紹介しておく。

随筆草木志	昭和11年7月25日 南光社
趣味の草木志	昭和13年6月22日 啓文社
植物記	昭和18年8月20日 櫻井書店
續植物記	昭和19年4月10日 櫻井書店
牧野植物随筆	昭和22年6月20日 鎌倉書房
續牧野植物随筆	昭和23年7月15日 鎌倉書房
趣味の植物誌	昭和23年7月15日 壮文社
随筆 植物一日一題	昭和28年3月15日 東洋書館

牧野植物一家言

昭和31年1月10日 北隆館

植物学九十年

昭和31年9月20日 宝文館

草木とともに

昭和31年11月5日 ダヴィッド社

植物随筆 我が思い出(遺稿)

昭和33年1月20日 北隆館

## 「植物随筆集」より ラフシア・アルノルヂ

「スマトラ」島は馬來群島の一なり。島内喬木天に参し積翠遠く幾里に連り鬱として深林を成し藤蔓縦ままに縦横し太古以来斧斤未だ之れに入らず珍禽葉間を穿ちて歌い怪猿枝條を度りて叫ぶ。忽ち一人の従僕倉皇走り来り叫んで曰く「先生早く奴と共に来れ、花あり、非常に大、奇麗、珍怪無類、早く来れ、先生奴と共に早く来れ」と。博士「アルノルド」氏之れを聞かば否や直に藤蘿を排し榛莽を穿ち行て將に一町に垂んとす。従僕果して一巨花を指して之れを示す。花は荆棘の下に在て直ちに地に接して開けり。其状奇絶誠に植界中の一大怪異なり。「アルノルド」氏驚異措く能わず直に之れを取て以て我小舎に運ばんと欲し乃ち鎌を把て之れを切り離さんとするに際して端なく此怪物は其処に横走せる小根より發生せることを見出せり。此は是れ当時此奇花発見の概況にして時は維れ西曆 1818 年即ち我文政元年に該り今を距る事正に 82 年の前に在り。而して博士「アルノルド」氏とは実に当時同島「ベンクーレン」の知事「スタンフォード・ラフレス」氏一行の一員にして此一行は右「ベンクーレン」より発程して以て同島の内部に向い其第一の旅行を企てたる一団体なりしなり。

「ラフレス」氏は博士「ホルスフィールド」氏に托して此奇怪絶類なる一大花の記文、図画並に標品を英国に送り且つ博士「アルノルド」氏の病没を報ぜり。而して同国に在ては彼の高名なる植物学者「ロバート・ブラウン」氏詳に之れを究明し此に発見者の名誉を表彰して其姓氏を取り創めて之れを「ラフシア・アルノルヂ」(Rafflesia Arnoldii)と名づけ永く発見者の名を後世に垂るるの用意を為し其研究の論文は此新学名を伴うて西曆 1820 年 6 月 30 日遂に公にせられたり。是れぞ即ち本号の巻首に掲出したる奇抜なる一大寄生植物なりと知るべきなり。

(次ページへ続く)

「ラフレシア・アルノルヂ」には茎の見るべきなく又敢て葉を具えず唯全一の花体より成る。其生ずるや突如として葡萄属植物の蔓上或は根上に発出す。始め小瘤を成して其皮下に潜むと雖ども漸く大にして忽ち皮を破りて露出し日を逐うて益々怒張し大き大に加わり遂に期に及んで花蓋を開き恰も其蔓本然の花の如し。花開きて数日漸く腐爛に就く。

其花未だ開かざるに当てや其状毬の如く又人頭の如し。外面に数片の苞葉ありて其大小亦均しからず。蕾時は内部に花蓋を包擁し其状宛として甘藍<sup>はぼたん きゃべーじ</sup>の葉毬を見るが如く而してその色暗褐にして且つ沈在せる脈絡あり。花は雌雄を分ちて生じ雄花雌花其形貌敢て異ならず。花蓋は其下部筒を成し花蓋片は蕾の時は互いに掩蓋して相畳むと雖も花放らく時は平開して5裂し其大なる者は花径約そ3尺を超え各花蓋片は長さ1尺、厚さ2分乃至6分余あり。花中に凡そ3升8合許の水を盛るを得べく又全花の重さ凡そ1貫900目許を秤るべし。而して花蓋は赤煉瓦色を呈し黄白色の大小突瘤ありて花蓋中の表面に満布す。厭う可き腐肉の臭を放つ。蠅の如き昆虫為めに其臭気を逐うて飛来し花上に徘徊して往々其上に卵子を産下す。中央に肥厚肉質の一花環ありて横わり下は花蓋筒の上辺と相連り且つ下て其筒の内面に沿附し下部に茸々<sup>じょうじょう</sup>として無数の小突起を群生す。花筒の中央には肥厚なる一大中央床直立し下部は花蓋筒に付着し而して其基部<sup>しゅうそう</sup>を周匝して少しく斗出せる輪縁を有す。床頂は広且つ平にして而して小柱状の突起群立す。其床頂の周辺は更に側方に突出し而して縁端一たび垂れて復上<sup>また</sup>向し雄花に在ては其下縁の内部に無柄の葯<sup>つら</sup>を列ね葯は頂に一孔ありて花粉<sup>はっさん</sup>を発糝す。雌花に在ては花中にただ葯を具えず、而して中央床の内部一大子房を成して内に多数の胚珠を蔵す。花後雄花は腐爛すと雖も雌花に在りては其子房は多種子を容れたる一大漿果と成り苞葉、花蓋片並に中央床の上部は謝し去りて其外面略々亀甲を列するが如し。

「ラフレシア・アルノルヂ」発見の後に至りて漸次に同属に属せる他の品種を見出し今は其品数8種を算うるに至れり。而して其花の巨大なる植物界中能く之れに如くものなく優に永く同界中の偉觀をなせり。各種皆葡萄属植物の蔓上に寄生し其花大なるものは前述の如く花径3尺に余ると雖ども然も亦其種類によりては花径僅かに

(次ページへ続く)

2、3寸に出でざる者あり。又其産地も亦其種類により只「スマトラ」島に限るにあらずして尚「ジャワ」「ボルネオ」並に「フィリッピン」諸島に産するを知る、而して本属即ち「ラフレシア」属は他の近縁なる数属と共に相合して此に特立せる「ラフレシア」科を構成せり。

今左に本属所属の品種を掲げ且つ其産地を附記せん。是れ今日世に知られたる「ラフレシア」属の全種数なり。

- |       |                                  |                |              |
|-------|----------------------------------|----------------|--------------|
| ( 1 ) | <i>Rafflesia Arnoldii</i>        | R.Br.          | 「スマトラ」島に産す   |
| ( 2 ) | <i>Rafflesia Hasseltii</i>       | Suring.        | 「スマトラ」島に産す   |
| ( 3 ) | <i>Rafflesia Horsfieldii</i>     | R.Br.          | 「ジャワ」島に産す    |
| ( 4 ) | <i>Rafflesia Patma</i>           | Bl.            | 「ジャワ」島に産す    |
| ( 5 ) | <i>Rafflesia Rochussenii</i>     | Teysm.Et Binn. | 「ジャワ」島に産す    |
| ( 6 ) | <i>Rafflesia Tuan-Mudae</i>      | Becc.          | 「ボルネオ」島に産す   |
| ( 7 ) | <i>Rafflesia Schadenbergiana</i> | Goepp.         | 「フィリッピン」島に産す |
| ( 8 ) | <i>Rafflesia manillana</i>       | Teschem.       | 「フィリッピン」島に産す |

(明治32年3月20日発行『博物学雑誌』第10号所載)

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。



昭和 16 年 11 月 23 日付少国民新聞（毎日小学生新聞の前身）の切り抜き  
9 ページに本図の解説文を掲載しました

次号、牧野シリーズ最終回ではいよいよ『牧野日本植物図鑑』を取り上げます。

## 日光・外山（とやま）ハイキングと滝尾古道散歩

～知られざる名所旧跡を訪ねて～

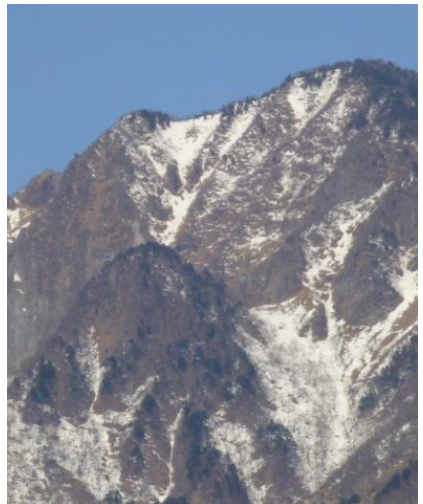
1月13日（日） 天気・晴れ

1年で最も遅い時分の日の出から間もない早朝7時に集合、総勢12名、車2台に分乗して日光に向かいました。まだ空いている小杉放蕪美術館駐車場に車を置き、トイレを借りるなど、1日お世話になりました。

第一目的の外山（880m）には朝のうちに登頂、世界遺産として賑わう2社1寺からほど近いのに閑散とした杉木立の山で、参道沿いの随所に残る鳥居や石塔に江戸時代以来の古人の信仰の跡が偲べれます。山頂からは赤薙山方面の展望を堪能（写真参照）。寒い日が続いて心配でしたが、幸い天気は良く風も弱く、登山中は汗ばむことも。

車を置いた美術館下の稲荷川沿いの広い草地で、各自持参の弁当の他、焼き網を展開して餅やソーセージを焼きながらの昼食を楽しみ、午後は東照宮が造営される以前の古い日光の姿を求めて滝尾古道へ。

神橋を左に見ながら、世界遺産の賑わいを離れて森閑とした本宮神社、四本竜寺へ、ここが言わば日光発祥の地です。稲荷川沿いの古道に出て、冬木立の中の緩やかな登り道を空海ゆかりの滝尾神社まで、随所にある勝道上人の古跡他諸々の遺物に足を止めながらそぞろ歩き。霜柱の長さにも驚きますが、水路の方々に氷の造形が終日残り、子どもたちの遊び道具になるなど、さすがに寒冷地です。行者堂から二荒山神社参道に出て、日光らしい人出に再会。



外山山頂から見た赤薙山方面  
左下寄りに黒く内ノ外山

すっかり日の暮れた帰り、地元の酒蔵への寄り道は慣例となりました。

（北光クラブニュースNo.122掲載）

❁ 参加者

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、  
小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子、  
阿部瑞穂・良司・みゆき（計12名）

❁ 見た鳥

エナガ、シジュウカラ、トビ

❁ 見た樹木(各50音順)

アカマツ、シキミ、テイカカズラ、  
ツゲ（植栽）、モミ（常緑樹）  
イタヤカエデ、イヌブナ、カツラ、クリ、  
タイワンフウ（植栽）、タカオモミジ、チドリノキ、  
ツノハシバミ（蕾）、ネジキ、ヤマハンノキ、  
ヤシャブシ、リョウブ（落葉樹）

❁ 見つけたキノコ

キツネノチャブクロ（写真→）

❁ 虫の痕跡

キボシアシナガバチ（巣）、セグロアシナガバチ（巣）

❁ 写真で振り返るあれこれ



外山をバックに全員集合



外山登山口



こんな道を登って行きます



幾つもある石鳥居の1基には「元禄」の文字が…



←モミの木



イヌブナの木→



※ 参加者からいただいたおたより



草上の昼食



四本竜寺三重塔



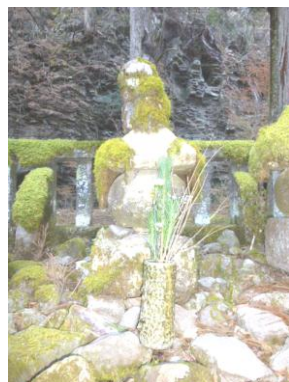
「ゆき」(ささき ますみ・年少)



滝尾古道



白糸の滝を背景に



古色蒼然たる何某の墓？



## 外山ハイキングでの思わぬハプニング

ハイキング中、道に落ちていたキボシアシナガバチを見つけた。動かず、冬だから死んでいると思って手に取り、さてどこへ入れようかと考えているうちにチクリと一刺しやられた。手袋をしていなかったのもいけな。温暖化の影響なのか、近年はおそくまで生きているようだ。

危険な昆虫は死んでいるように見えても、決して油断してはいけないということを、改めて思い知らされた。ハチの毒針は産卵管が変化したもので、働きバチはメスなので刺される。その辺で飛んでいるのはすべて働きバチで、いたずらしないかぎり襲ってくることはないが、巣に近づくことはとても危険だ。知らずに近づくこともあり、ハイキングに出かけたときは、出入りしているハチがいないか、注意する必要がある。

ハチの巣が多い所ほど、自然度がよく残っているという基準になっているのは良いことだが、皮肉でもあり、被害にあわないように気をつけるしかない。

(山口龍治)



外山山頂からの赤笹山（奥社跡）の眺望

### 世界の驚異(三十)

#### 世界一の大花

飯塚鈴児

見るからに毒々しいこの花は、南洋スマトラの大森林に稀に見る世界一の大花であります。一八一八年にイギリス人によつて発見されましたが、当時は全く根も葉も無い話だと云つて、誰も信じなかつたそうです。根も葉も無いのは当然、花の形こそして居ても実は菌類なのです。蕾はキャベツ位ですが、花は一メートルを越え、色は牛肉の様で、腐った肉と同じ悪い臭を放つので、たまらないそうです。

南洋には植物にも動物にも、数々の不思議があり、開発すれば限り無い資源があります。やがて大東亜共栄圏の樹立を理想とする日本人が、その開発の使命を担わなければなりません。

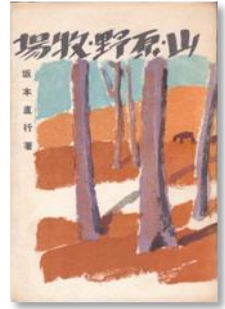
5ページのラフレシアの紹介記事の解説文、戦時色濃い世相を感じさせて興味深い。なおこの花は菌類と説明されているがれっきとしたラフレシア科の寄生植物です。

## 那須黒羽、社寺参詣と巨樹探訪の旅

はなかめやま  
～花瓶山のブナ、那須神社のヤマザクラ、  
ゆせん  
温泉神社のアカガシ～

僕は正月にはめったに家にみた事が無いのである。大抵は山登りで、元旦をテントの中で迎えるのである。それが僕には一番のお正月なのである。一年の間鬱積した山への熱情を、冷たい雪の上で燃やすのだ。

僕は冬を楽しみながら、又やって来る春に期待をかける。いつもやって来る冬は、いつも同じ冬ではない。それと同じ様に春も亦待たれるのである。



坂本直行著『山・原野・牧場』昭和12年4月20日 竹村書房発行

栃木百名山の一つで黒羽町と茨城県大子町の県境に立つ花瓶山(692m)に登り、ブナの古木を訪ねましょう。今回は花瓶沢土場まで車で入り、山頂からブナの古木まで足を延ばし、同じ道を土場に戻りたいと思います(往復2時間)。下山して黒羽芭蕉の館、黒羽城址を見学し、那須神社(金丸八幡)にヤマザクラ、温泉神社にアカガシを訪ねます。春の兆しを探しながら、出掛けてみませんか。

日 時：2月17日(日) AM6:00 北小西門集合

行 程：鹿沼——黒羽——うつぼ沢出合——花瓶山土場……花瓶山

……ブナの古木……花瓶山土場——うつぼ沢出合——黒羽芭蕉の館

……黒羽城址——温泉神社——那須神社——鹿沼

服 装：防寒着(セーター、ジャンパー、タイツ)、帽子、手袋、靴下(2枚重ね)、  
軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、ポット、レジャーシート、雨具、お弁当、おやつ、  
お手ふき、タオル、ちり紙、筆記用具、レジ袋

あると便利なもの：双眼鏡、カメラ、ガイドブック

(栃木百名山ガイドブック、とちぎの社寺散歩、近世栃木の城と陣屋)、

1/25,000 地形図は「黒羽田町」「町付」

会 費：おとな 500 円、子ども 250 円

(他に黒羽芭蕉の館入館料おとな 300 円、小中学生 100 円)

初めての方は他に保険料 800 円

問合せ：自然観察クラブ 阿部(090-1884-3774)



## 愛読者からのおたより

お正月があつという間に過ぎてしまいました。今日は七草粥でしたのに、すっかり多忙で忘れてしまいました。

例年だと庭のどこかでナズナ、ハコベラ、ゴギョウウなど探せたのですが、今年は寒さのせいか、それとも雑草を目の敵にしているのせいか、やっと小さなハコベラを見つけただけでした。

子どもの頃、母が「七草なずな唐土の鳥が渡らぬ先に 七草叩いてトントントン」と唄って七草粥のいわれを語ってくれた覚えがあるので、毎年欠かしたことがなかったのに……。どうしても忘れ物をしている気がして落着かず、夕粥でもいいやとセットの七草を買ってきて、私の七草粥を待っている友だちもいるのでわけを言って夕食に届けた次第です。

昨年は貴誌、月報のおかげで私にとって、とても充実した一年でした。拙文をごいていねいに取りあげていただき、その上会長さんの牧野富太郎への思い入れの深さのほども知ることができました。

動植物が好き、本が好き、旅が好きだった父の世界を思い出させていただいているようで大変うれしうございました。いつもなつかしい思いで、ほっとした思いで読ませていただいております。

これからも楽しみにしています。(後略)

(一月七日夜・櫻井節子)



ナズナ



コオニタビラコ  
(ホトケノザ)

## 西明寺の暖帯系植物群落

西明寺の森は、去年の例会案内に暖帯系の植物が自生しているとある。益子・雨巻山のハイキングのとき、時間があれば行く予定だったと思う。1月14日に阿部隊長と西明寺へ出かけた。森に入り、まず目にしたのはガガイモ科のキジョランで、私の故郷の奈良でもめったにお目にかかれない草本植物である。北へ旅をするマダラチョウ科のアサギマダラの食草としても知られている。その辺を見渡すとスダジイの巨樹があり、この樹木も暖地の山中、特に海岸沿いに多い。次いで隊長がよく言うカラスザンショウやカゴノキも発見。まさに暖帯系植物を温存した森といえよう。古代の茨城県の海岸線は、どうだったかは判らないが、植物の分布を広げ、伐採を免れた社寺林にのみ、細々と残ったと考えられる。雨巻山で見たジャケツイバラも、紀伊半島では三重県や和歌山県の海岸近くの暖帯林に多い。この日は大雪で、これ以上の散策はあきらめたが、いつの日か観察会に取り上げていただき、多くの人にこの貴重な森を見てほしいと思う。

(山口龍治)



カゴノキの幹

前号（月報第9号）5ページに掲載した山口さんの寄稿「雨巻山で見た樹木」に誤字がありました。

2行目（誤）ウラジロガシ→（正）ウラジロ

3行目（誤）樹木葬→（正）樹木相

筆者からご指摘いただきました。甚だお恥ずかしく、また申し訳ないことでした。

お詫びと共に訂正方をお願い申し上げます。

（編集部）



サカキ



クロガネモチ



キジョラン

## 植物屋の日記

### プラタナスとスズカケノキ

先日、南押原中学校の丸山良浩先生の案内で校庭の樹木を観察させていただいた。ヒノキの7~8本並ぶ、少し離れた所にサワラが1本あってうれしかった。葉の裏側を見てY印字がヒノキ、X印がサワラで判別するのだが、葉それ自体もサワラの方が細くてしなやかである。それに幹を見ても、樹皮の様子がまったく違う。このように近い種類が一緒に植えてあるのは、植物愛好家にとってありがたいものである。小学校との境に鹿沼では最大級と思われるエノキがあったのにも驚いた。そしてここにもプラタナスの大きな木が2本あった。一時期街路樹としてもはやされた樹木である。

たしかフォーククルセイダースだったと思うが、こんな歌があった。

プラタナスの枯れ葉舞う冬の道で

プラタナスの散る音に振り返る

誰かを求めて振り返っても

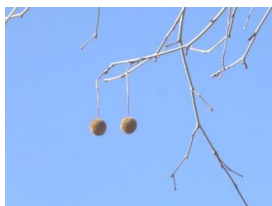
そこには風が吹いているだけ



北小学校にもプラタナスの巨木が1本ある。僕が子供の頃は確か4本位あった。昭和3年1月生まれの僕の父親は中央小学校に入学したが、新しく北小学校が開校し、2年生から北小学校に移ったらしい。その父が卒業記念に植えたというから昭和15年頃に植えられたものだと思う。

最近の植物図鑑によると、「スズカケノキ科はスズカケノキ属1属からなり、世界におよそ10種が知られる。日本には自生はないが、スズカケノキ、アメリカスズカケノキ、モミジバスズカケノキの3種類が、公園や街路に植えられ、いずれも属名のプラタナスの名で親しまれている。」という。葉にはいずれも切れ込みがあり、ア

(次ページへ続く)



←プラタナスの実  
「すずかけ」の名の通り  
実が鈴生り



近くで見ると→

メリカズカケノキの葉の切れ込みは浅く、モミジバスズカケノキの葉の切れ込みはやや深い。そしてズカケノキの葉には細くて深い切れ込みが入る。北小学校のものは葉の切れ込みが浅いのでアメリカズカケノキとしていたが、南押原中学校のものも落葉の形からしてアメリカズカケノキだろうと思った。もしかして実がなっていないかな、と試してみたこともない、形も知らない実を探そうと思って見上げたら、なんと丸い実がたくさんなっている。「やった」と思ってさっそく図鑑を調べてみた。花の項を見ると、「1本の軸に球形の花序(雌花序)をズカケノキは3~7個、モミジバスズカケノキは2~3個、アメリカズカケノキは1個、まれに2個つける」というから、実の数も同じである。このプラタナスは当然、実を1個ずつぶら下げている。外来種に興味を持とうとしない僕はこの和名の語源も知らなかったが、実を見たとき、「クリスマスツリーに鈴を掛けたみたいだ」と思った。「ズカケの小路」というジャズの名曲もあったと思う。街路樹も外来種も調べてみると面白いものである。

(阿部良司)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第10号

2013年2月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市上田町 1923

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

